

第二章 原文・先人訳

| 蓮如書写本第二章<br>（ただし段落と番号①～⑬は加来が便宜的に分けた）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 第二章口訳<br>（安良岡康作『歎異抄全講読』大蔵出版、1990 年、71－73 頁）（ただし〔〕記号と傍線は加来が補った。）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 三<br>一<br><br>①おのゝの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御 <sup>おん</sup> こゝろざし、ひとへに往生極樂の <sup>みち</sup> をとひきかんがためなり。<br>②しかるに、念仏よりほかに往生の <sup>みち</sup> をも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。<br>③もししからば、南都・北嶺にもゆゑしき学生たち、おほく座せられてさふらうなれば、 <sup>かのひと</sup> にもあひたてまつりて、往生の <sup>要</sup> よくゝきかるべきなり。<br>④親鸞におきては、 <sup>たゞ</sup> 念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、 <sup>よきひと</sup> のおほせをかぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり。<br>⑤念仏は、まことに <sup>浄土</sup> にむまるゝ <sup>たね</sup> にてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて <sup>存知せざるな</sup> | （第二章）<br>一<br>①おのおの方が、十以上もの国境〈くにざかい〉を越えて、わが身・わが命を思い返さないで、〔私を〕お尋ねにおいでになりました、〔その〕ご意向は、いちずに、極樂に往生する <sup>手だて</sup> を問い尋ねようとするためであります<br>②ところが、念仏より外〈ほか〉に、往生の <sup>手だて</sup> を心得ており、また、往生のための教えを書いた文章などを知っているであろうと、私に関心を持って知りたいと思ひになっておいでになりますならば、〔それは〕大きなまちがいです。<br>③もしそう〔お思い〕ならば、奈良の都や比叡山にも、すばらしい学僧たちが数多くおいでになりますそうですから、 <sup>それらの人々</sup> にもお逢い申し上げて、極樂に往生するための <sup>大事なこと</sup> を、念を入れてお尋ねになるのがよいのです。<br>④〔この〕親鸞においては、 <sup>ひたすら</sup> 念仏をとなくて、阿弥陀如来のお助けをこうむるのがよいという、 <sup>すぐれた人</sup> のお言葉を身に受けて、〔それを〕信ずる以外には、各別の理由はないのです。<br>⑤念仏を申すことは、ほんとうに、〔極樂〕浄土に〔往って〕生れる <sup>因〈もと〉</sup> なのでございましょうか、あるいは、地獄に堕ちるはずのしわざなのでございましょうか、全然、〔私は〕 <sup>心得ておりませ</sup><br><sup>ん</sup> 。 |

り。

⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。

⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける<sup>み</sup>身が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはじこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき<sup>み</sup>身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

⑧弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。

⑨仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。

⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。

⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもて<sup>か</sup>むなしかるべからずさふらう歟。

⑫詮ずるところ、愚<sup>せん</sup>身の信心におきてはかくのごとし。

⑬このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと{云々}。

⑥〔私としましては、〕たとい、法然聖人におだましをこうむって、念仏したことで地獄に堕ちてしまったとしても、決して後悔するはずはございません。

⑦そのわけは、〔念仏〕以外の修行に精進・努力して仏に成ることができた<sup>私</sup>が、念仏を申して、〔そのため、〕地獄にも堕ちますのならば、それこそ、おだましをこうむっ〔て堕ちてしまっ〕たのだという後悔もございましょうが、しかし、どのような修行にも達し難い<sup>私</sup>なのですから、結局のところ、地獄はきつと堕ちてとどまる所なのですぞ。

⑧弥陀の本願が真実であらせられるならば、釈尊のご説教が偽り言のはずがありません。

⑨釈尊のご説教が真実であらせられますならば、善導大師の御解釈が偽り言を言われるはずはありません。

⑩善導の御解釈が真実ならば、法然聖人のお言葉が、どうして偽り言でありましょうか。

⑪〔その〕法然聖人のお言葉が真実ならば、この親鸞が申します趣旨も、同じように、根拠のないはずはございませんよ。

⑫結局のところ、〔この〕愚かな<sup>私</sup>の信心においては、このようなものです。

⑬こう申し上げたからには、念仏を採用してお信じ致そうとも、あるいは捨てようとも、皆さん各自のお考え次第です。……

## I 前回を受けて

・『歎異抄』第二章の師訓篇における位置『歎異抄』第二章の主題もしくは主眼とは何か。「先師口伝之真信」の何をあきらかにしようとするのか。

・さめしま氏からの質問「「かぶる」と「きく」は違いますか？」——乗杉氏からの質問「語源として、おほせをかぶりて」というのは、自分の外におほせを置くのではなく、自分

に引き入れたというのは、どのような点から、そのように、言えるのでしょうか？」——  
「「被りて」は、こうむって、受けて。『日ポ』には、「……あるもので自分を覆う」とあり」（『安良岡『全講読』78頁）——「よきひとの仰せをかぶる」という聞き方、知り方——「おほ・す【仰す】他動サ下二（解説）オフ（負ふ、ハ四）の古い他動詞形で、人に背負わせるが原義。さらに、人に課し命じる、義務をもたせる意となり、そこから言いつける、命令する意に転じた。」（大野晋『古語基礎語辞典』262頁）——西田幾多郎の場所的論理と対象論理との区別を手がかりに

・「ただ念仏」の「ただ」について

前回 T 氏からの質問「法然上人のお念仏と親鸞聖人のお念仏には、只と唯の違いがあるように思われました。いかがでしょうか？ 只＝ただひたすら。唯は、～してをとっぱらった念仏。すくい条件としての念仏でなく、念仏成仏。われわれの生き様は、～しての生き方しかない、このように感得しましたがでしょうか？」（T 氏より）

「ただ」……「今ここに「ただ」といわれるのは、唯称弥陀であり、一心一向、一向専修の念仏である。」（曾我量深『歎異抄聴記』真宗文庫、145頁）

「今日のような時代には、人間の思想が非常に複雑であり、しかもその複雑にたえられないのである。このような時代には最も単純な、単刀直入なことばが必要ではないか。」（曾我量深『歎異抄聴記』真宗文庫、146頁）

法然の『一枚起請文』には、次のようにある。

「ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。……只一こうに念仏すべし。」（『一枚起請文』『聖典』962頁。＊以下『聖典』頁は初版の頁。）

親鸞の『唯信鈔文意』には、次のようにある。

「「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり」（『唯信鈔文意』『聖典』547頁）

私は『唯信鈔文意』における「唯」の解釈について、「ただこのことひとつ」に加えて、「ふたつならぶことをきらう」という選択の精神と、「ひとり」という実存的決断を感じるので「唯」で受けとめたいと思う。

宗教とはなにか。一生をかけても悔いのないただ一言との出会い。

親鸞は「ただ念仏」という一言だけを聞きたかった。

## Ⅱ 「地獄一定の自覚」について——『歎異抄』第二章と主題と「地獄一定の自覚」について

- ・功利的な救済観を破る自覚。

・「地獄」という用例は第二章以外には、「一 辺地の往生をとぐるひと、ついには地獄におつべしということ。この条」（第十七章）とあるだけ。

・江戸期の宗学では第二章の主題として二尊二師の相承を重視する傾向があるとされる。つまり「地獄一定の自覚」は第二章の中心問題ではなく仮に設けた説示で、それほど注目されていない（佐々木覚爾「『歎異抄』第二章の諸説と問題点『『歎異抄』に問う—その思想と展開—』永田文昌堂、2007）。→「まとめると、『歎異抄』第二章の主眼は、先行理解ではF〔⑧～⑪〕の二尊二師の相承に力点が置かれていた。しかし、内容からみても、文法上の解釈からみても、その理解には問題が残る。逆に、文法通り素直に読めば、関東から疑惑を抱えて訪ねてきた弟子に対し、知識やはからいによって念仏の真実なることを理解し証明するのではなく、自\*154らの信はただ師法然の教えを仰ぐほかにないことを力説した親鸞の姿勢が窺える。浄土真宗の信心は、自らのはからいや学問・知識を超え離れたものであることを、仮設という手段によって、力強く説かれたのであった。第二章の主題は、その一点につきるといえる。／……この文章からわかることは、浄土真宗の信心について、知識やはからいと、ぎりぎりの分かれ目を伝えようとする親鸞の姿勢である。その問題が何であるかまではわからない。だが、何らかの事情のもとに不安を抱えて訪ねてきた弟子に対して、揺らぐことのない他力の金剛心とはいかなるものか、言葉では説明できない境地を何とか伝えようとする熱い思いが感じられる。推測しでかかないが、それは親鸞自身が法然との邂逅において経験してきた記憶と重なりあった故の言動ではないだろうか。」（佐々木〔2007〕153-154頁）

その理由は何か。佐々木は「その問題が何であるかまではわからない」「推測でしかないが」と述べているが、佐々木が仮説とする内容こそその境地の内容ではないか。

・地獄一定の自覚こそが「法蔵魂」への目覚めであるという受けとめがなかったからであろうか。

#### ・疑問

曾我量深『歎異抄聴記』においても第二章における「地獄一定」については「地獄一定の自己否定」という小見出しのもと「念仏の中におのずからほんとうの否定がある。念仏の法の中に法爾自然の大否定がある。その法爾自然の大否定を阿弥陀如来因位の法蔵菩薩がその念仏の一道の中にあらわれて、ここに選択本願として大きな意義をみいだした。それからはっきりした伝統の道として、伝統の道というものを成就なされたのである。だから「たとい、法然聖人に……とて地獄は一定すみかぞかし」。ここから深く阿弥陀如来の選択本願が念ぜられ、自己否定がでている。選択本願の念仏の中にこの語が輝いている。選択本願のいわれとして二種深信がある。」（曾我量深『歎異抄聴記』東本願寺文庫、161頁）と機の深信と結びつけられて述べられているが、「嘆仏偈」や阿闍世の回心の言葉と結びつけられているわけではない。金子大榮『歎異抄聞思録』でも同様

である。

・機の深信

ここにはっきりと機の深信をあげられて、すべてみな宿業である。……最後の心は「地獄は一定すみかぞかし」、地獄一定におちていくよりほかないものである。宿業の自覚にたって自力無効とはっきりおおせられたのである。……最後のすわりは地獄一定よりほかないと、そこに最後のすわりをおいて法然商人のおおせを信ずるという純粹感情を表明されたのである。ここに聖人はさらに一転して、就人立信より就行立信に転じてお示しになるのである。

（『歎異抄聴記』真宗文庫、166-167 頁抜粋）

・就人立信から就行立信へ

⑤念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。

・⑤以降について、曾我量深は「だから、「信ずるほかに別の子細なきなり」はこれ全体が行巻にあるとこう表明される。もし信巻開頭の意義があるならば、「念仏は」という以後のところにあるとわたしは思う」（『歎異抄聴記』真宗文庫、151 頁）と位置づけている。

・「浄土にむまるるたね」と「地獄におつべき業」という対比が示す問題点。——なぜ極楽や地獄、浄土と穢土という対比ではないのか。——門弟たちの関心「ひとえに往生極楽の道をといきかん」との対応。——『歎異抄』ではこの第二章にのみ「極楽」の語を使用し、他では「浄土」「報土」などを用いる。ちなみに「報土」は「化土」や「辺地」などに対する言葉。

・「ただ念仏」という行が付与する人生の意味——「総じてもて存知せず」——「地獄からの自由」か、「地獄への自由」か。

・「罪福を信ずる心」——幸福になりたい人は幸福にはなれない。幸不幸という価値観は無上尊を実現できない。

・この「まことに」は、次段の「まこと」の伝統に展開する。「まこと」ということは「存知」という次元にはなりたたない。「まこと」が成り立つのは弥陀の本願に根拠するときのみ。

一、「総じてもて存知せざるなり。」

・「「惣じて」は、副詞で、すべて、みな、全くの意であるが、下に否定を表す語（ここでは「ざる」のある時は、決して、少しも、全然、の意となる。」（安良岡『全講読』78 頁）

・「存知」という知り方——「存在を知っている、よく知って心得ている」（安良岡『全講

読』74頁)

・「存知」の対義語は？→「念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしるたるらん」——「しるべし」「しりとおし」など——「「善惡の二つ総じてもて存知せず〔中略〕ただ念仏のみぞまことにておわします」（『歎異抄』後述『聖典』640頁）

「浄土にむまるるたね」か、「地獄におつべき業」か、総じてもて存知せず「善惡の二つ総じてもて存知せず」

⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。

・「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう」ではない。→「念仏して」がないと人格への執着になってしまうのではないか。→『執持鈔』との比較。

・『歎異抄』と『執持鈔』との表現の異なり

されば、われとして浄土へまいるべしとも、また地獄へゆくべしとも、さだむべからず。故聖人黒谷源空聖人の御ことばなり の仰せに、「源空があらんところへゆかんとおもわるべし」と、たしかにうけたまわりしうえは、たとい地獄なりとも、故聖人のわたらせたまうところへまいるべしとおもうなり。〔中略〕たとい、弥陀の仏智に帰して念仏するが地獄の業たるを、いつわりて往生浄土の業因ぞと、聖人さずけたまうにすかされまいらせて、われ地獄におつというとも、更にくやしむおもいあるべからず。そのゆえは明師にあいたてまつらでやみなましかば、決定、惡道へゆくべかりつる身なるがゆえに、となり。しかるに、善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さればただ地獄なりというとも故聖人のわたらせたまうところへまいらんと、おもいかためたれば、善惡の生所、わたくしのさだむるところにあらずというなりと。これ自力をすてて他力に帰するすがたなり。

（『執持鈔』『聖典』643－644頁）

・「「たとひ」は、下に「とも」「ども」を伴う時は、かりに、よしやの意」（『全講読』79頁）

「さらに」は、副詞で、下に打消の語（ここでは「ず」）が来る時には、全然、全く、決して、少しも、の意となる。（同上）

→また「たとひ」は『大無量寿經』において「設」「仮令」として示される重要な表現。とくに「仮令」は嘆仏偈と第十九願に出る。

・「法然聖人にすかされまいらせて」 ここで始めて法然の名が出る。「賺（すか）す」は、言いくるめてだます、だまして誘う。」（『全講読』79頁）

一、「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう」

・なぜ「念仏」すると「地獄におちたりとも」まったく後悔するはずがないのか。

- ・地獄に堕ちても後悔しないという自覚の根底に存在する根源的共同性

「仮令（たとい）、身を 諸（もろもろ）の苦毒の中に止（お）くとも、我、行ずること精進にして、（我が行は精進にして）忍んで終（つい）に悔（く）いざらん。」

（『大無量寿経』嘆仏偈『聖典』13 頁）

「わたくしは、阿鼻〔地獄〕に行つて常に住しようとも、誓願の力を決してひるがえさないであろう。」

（サンスクリット本）

「阿鼻の苦の衆生を度し尽くすとも 発す所の弘誓は永（とこし）えに断えざらん」

（『莊嚴経』）

「（大王、仏に白さく）……「伊蘭子」は、我が身これなり。「梅檀樹」は、すなわち我が心、無根の信なり。…「世尊、もし我審かによく衆生のもろもろの悪心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もって苦とせず。」その時に摩伽陀国の無量の人民、ことごとく阿耨多羅三藐三菩提心を発しき。」

（『教行信証』信卷引用『涅槃経』『聖典』265 頁）

⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身《み》が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

- ・二つの「身」

「自余の行もはげみて仏になりべかりける身」→「さふらはばこそ」→「後悔もさふらはめ」・「いづれの行もおよびがたき身」→「なれば」→「地獄は一定すみかぞかし」→「愚身の信心」

一、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

・この「いづれの行もおよびがたき身」という自覚は、個人的なものか、全人的なものか。たとえば、次の第三章の「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまひて」という言葉などとの関係。個人の最も深い有限性の自覚が、すべての他者の連帯を可能にする地平を開く。

・「なれば」……（已然形＋ば＝既定条件、だから）。次の段の「まさば」「ならば」（未然形＋ば＝仮定条件）

- ・「身」は宿業をあらわす。

・「一定すみかぞかし」——「一定」と「決定」——「ぞ」と「かし」で、注意を促し、念を押す気持ちを表し、「相まって、なのですぞ、の意味となる」（『全講読』81 頁）

・「たとひ……地獄におちたりとも」の仮定的な表現から「とても地獄は一定すみかぞかし」の断定の自覚へ。